



追悼

仲村優一先生、安らかに

松原 康雄（明治学院大学）

目黒駅近くに、今でも小さな喫茶店が営業を続けています。喫茶店が減少していくなかで、本格的サイフォンコーヒーを出すこの店には、故仲村優一先生にしばしば連れて来ていただきました。当時院生であった私は、明治学院大学大学院の非常勤講師としてケースワークを担当されていた仲村先生に授業と修士論文の実質的指導をお願いしていました。本来は、故三和治先生が指導教授でしたが、お二人の間でご了解があったと記憶しています。喫茶店でなにを話していたか定かな記憶はありませんが、日本社会事業大学の運営をなされるかたわらでの大学院授業は、ひとときの「別の時間」であったと思います。私自身は、学部の2年次に仲村ゼミを履修したことが、仲村先生に教えを受けるきっかけとなっています。その後、自主的な英語原典の和訳勉強会などを陰で見守ってくださるなど、前述した修士論文の指導を中心に本当にお世話になりました。

修士論文こそメアリー・リッチモンドをとりあげましたが、その後は児童福祉分野への研究に転換していった私は、時代を担った「仲村公的扶助ケースワーク論」の後継者たりえませんでした。そのことへの言い訳ではありませんが、仲村先生はいわゆる旧国立大のような「研究室」的な人の囲い込みはなさない先生でした。したがって、私を含め多くの研究者・現場ワーカーが仲村先生を師として仰いでいても、徒弟的な使役や無理強いはけっしてなさりませんでした。常に暖かい眼で見守ってくださり、必要なアドバイスをしてくださる先生でしたから、分野が異なってきていても、いろいろとお話しをさせていただき、貴重な示唆をいただきました。一方で、推薦状などでも「仲人口」的な内容のものは作成されず、長所もちろん書いてくださいましたが、欠点も客観的に記述されることを後に複数の仲間から聞きました。人間関係などにこだわらず、公平に評価されることはなんとなくわかっていましたから、常に緊張感をもって仲村先生の教えを受けていました。そういう一面はあるものの、決して冷たいかたではなく、前述のように喫茶店にも気軽に誘ってくださるお人柄でした。英語を学ぶことについては、ずいぶん勧められ、励まされもしました。私が在外研究でお世話になった **George Warren Brown School of Social Work** を紹介いただいたのも先生の国際的人脈からでした。一方的思いであるかもしれませんが、「弟子」として、長年のご指導に感謝しつつ、ご信仰のうちに天国への凱旋をなされたことを信じて筆を置きたいと思います。